

アメリカ新教育の思想構造

——デューイの実験主義教育理論の思想史的考察を中心として——

川 瀬 八洲夫

(昭和55年9月30日受理)

The Thought structure of Progressive Education Movement in U. S. A.

—on Historical study of The Thought from John Dewey's Experimental Educational theory—

Yasuo KAWASE

(Received September 30, 1980)

I

我国のアメリカ教育の本格的研究は戦後において広範囲に展開されはじめた。近代以降戦前の旧体制下では、いわゆる大正デモクラシー期を除いては、イデオロギー、學術体制上の制約等からつっこんだ研究はほとんどなされなかったといつてよいだろう。

戦後、政治・経済的、社会・文化的等のアメリカの影響に照応しつつ、教育におけるアメリカ研究も広範囲に展開されはじめたのであった。戦後直後はカリキュラム、教授理論、教育哲学等々の指針として、デューイ(J. Dewey)を中心としてのアメリカ教育論理がモデルとされ、教育実践の段階でも、教育学研究のレベルにおいても、積極的に研究されはじめたのであった。しかし、1950年代にはいると我国では、アメリカの経験主義、デモクラシー理論はイデオロギー的な面から、あるいは実践的な教授理論、カリキュラム論の面から、多くの批判が出されはじめ、以後アメリカ教育研究は多様な視点から進められてきたのであった。アメリカ教育についての歴史的、思想的研究も同じ傾向にあった。

本稿の主題であるアメリカ新教育運動の理論的研究は1960年代後半から体系的なすぐれた研究も出はじめたが¹⁾、アメリカ新教育運動——進歩主義教育——の基底役割を有する実験主義教育理論と実験学校、そのカリキュラム、児童観、方法論等のつっこんだ研究は必ずしも充分ではなかった。本稿ではこの側面について、一体的思想史的考察を試みようとするものである。

II

アメリカ新教育運動の展開は1919年進歩主義教育協会(Progressive Education Association—以下 P. E. A. とする)の設立と1924年の P. E. A. 機関誌「進歩主義教育」(「Progressive Education」)の発刊とその組織的拡大とをもって、1920年代の中葉から1930年代前半にかけて最盛期を迎えていた。そもそも P. E. A. はその創設大会で新教育運動推進の綱領を定め、それを7項目に集約して掲げたのであった。

綱領は

1. 自然的発達への自由の尊重(Freedom to Develop Naturally)
2. あらゆる作業における動機づけと興味の尊重(Interest, The motivation of all Work)
3. 課業の監督者としてでなく指導者としての教師(The teacher a guide. Not a Task-master)
4. 児童の発達の科学的研究(Scientific Study of Pupil Development)
5. 児童の身体的発達に影響するあらゆることにより多くの配慮をすること(Greater attention to all that Affects the child's physical Development)
6. 児童の生活の必要を満たすための学校と家庭の協力(Co-operation Between school and home to meet the Needs of child-life)
7. 教育運動のリーダーとしての進歩的学校(The Progressive School a Leader in Educational Movement)

として示していた。

さてデューイ(J. Dewey)はアメリカ新教育運動の理

論と組織、運動に多大な影響を与えていた。デューイの新教育理論は実験主義教育理論として知られているが、デューイはそれに関連しつつ、教育理論的には1890年代の後半から、系統的連続的に理論形成をはじめ、1916年教育について最も体系的な「民主主義と教育」(「Democracy and Education」)を公にするまでに、学校理論、カリキュラム論、児童論、教授理論、思考理論などを次々と公にしていたのであった。

デューイは彼の教育、哲学理論の構成において、伝統的なことからのほとんどについて、例えば、独断的な権威制度、形式、偏見、思考様式、態度等々について、きびしい批判を示しながら⁵⁾、新しい理論構成を大胆に提示していたのである。

デューイはシカゴ・デューイ実験学校を創設した翌年に当たる1897年、実験学校の教育に熱烈な意欲をもやしていた時に、彼の教育についての最も初期に当たる論文として、小論「私の教育信条」(「My Pedagogic Creed」)を明らかにしている。そこでは、「教育とは何か」「学校とは何か」「教育の題材」「方法の性質」「学校と社会進歩」等の五つのテーマに即して、当時としては画期的な教育論を端的に明らかにしたものであった。第一のテーマである「教育とは何か」の中で、真実の教育は児童の力を刺激することによって行われること、また児童に自己自身を使いこなす力を与えること、児童がその全ての能力を完全に、いつでも使用できるように訓練することではなければならない、そのために児童自身の力や興味や興味にたえず配慮がなされなければならないことなどを明言していた。また第四テーマの「方法の性質」では、児童の力と興味の発展の順序、児童の能動的な発展の性格、観念と行動。その制御等についてふれ、その他全テーマにふれながら初期の実験主義教育理論の基本原則の骨格を論じたものであった。

シカゴ・デューイ実験学校に関連して、その教育論を体系的に論述した「学校と社会」(「The School and Society」)は1899年に刊行された。そこでは学校の役割と性格を、児童の生活経験の場として、またその訓練の場として、活動の場として論じた⁶⁾のであったが、さらにデューイは、学校はその本質的な教育目的においては、「成長をいつまでも可能にさせるように能力を組織的にし、教育的成長、連続性を確実にすることである」⁷⁾と述べ、この価値判断の規準を「どこまでも断えざる成長の欲望を創り出し、またそれを実際に有効にさせるため

どのような手段を与えるか」⁸⁾においていたのであった。関連してデューイは学校教育は結局、常に児童の成長を可能ならしめるための合理的な生活を得させるためのあらゆる条件を供給するための事業であると性格づけておいて、よい教育とは結局、個々の児童の内部的活動(intrinsic activities)と要求(needs)とに基づいて目的を立てなければならないこと。また児童がする諸活動を共働する(cooperating)方法でなければならないこととしたのである⁹⁾。

成長や活動についての意味については、特にルソー(Rousseau, J. J.)やフレーベル(Fröbel, F.)をあげながら、いろいろな著作で論じているが、特にルソーに関連して、自然的発達・成長についてを、彼にあっては初期の著作「明日の学校」(「School of Tomorrow」—1915)で、詳細に論じていたのであった。

教育対象としての児童については、彼の方法論的立場から、本能、活動、興味、カリキュラム等多角的角度から分析されるが、これに関連して学校教育には絶対的に把握されなければならない視点がいくつか出てくるのである。

デューイは教育を意味する“education”の意味がよく、“ひき出す”(drawing out)の意味で使われるが、それは本来的に“注入する”(pouring in)と対照的に使われることにおいてのみ、適わしいという。本来子どもは、いわゆる“ひき出す”前にはげしく活動的であり、諸々の活動をするものなのである。子どもはこれらの諸々の活動に指導(direction)が与えられ、それらが組織的に取りあつかわれることによって、諸々の価値あるものへと向かう。この時の指導や組織的なあつかいが、本来の“education”—“ひき出す”ことの意味として理解されるべきとするのである¹⁰⁾。

この時の本来的に活動的である児童の原動力とは何であろうか。この原動力—潜在的な力はデューイの児童観にあって重要なものなのである。

デューイは児童のこの潜在的な力を“衝動”(impulse)と呼んだ。

デューイはこの衝動を四つに分けて分析している¹¹⁾。

- ①社会的衝動 (the constructive impulse)
- ②構成的衝動 (the instinct of making)
- ③探求的衝動 (the instinct of investigation)
- ④表現衝動 (the expressive impulse)

社会的衝動とはいえば、子どもたちの社会的本能であ

って、これは談話や個人的な交際やいろいろなコミュニケーションに示され、自己の経験を語り、他の経験を求めるものである。局限された興味が、無限に拡大される可能性をもち、そしてこれは児童の知的生活の主根となるものである。次の構成的衝動は、最初に遊びに、そして運動に、身ぶり、まねごとに現われ、次第に明確さを増し、やがて素材を手にして形にすることに発展する。いわば児童の内発的な構成への努力が、外在的なイメージ、形となって発展する。探求的衝動は、談話的衝動と構成的衝動の結合から生じるもので、これを価値ある方向へと利用し、指導しなければならぬものである。最後の表現衝動であるが、これはいい換えれば芸術的衝動であって、コミュニケーションの本能と構成的本能から生ずるものとされる。これらを発展させるには、表現に必要な道具や材料は、いつでも利用できるように準備されている必要がある。

こうした四つの衝動は、コミュニケーションの興味、探求—発見の興味、構成の興味、表現の興味としてとらえられなければならないものとされた。そしてデューイは「興味こそは自然の源泉であり、投資されない資本である。児童の活動的な成長はこれらの興味をはたかせることにかかっている」⁹⁾と結論づけている。

衝動は児童の活動の潜在的な力—いわば成長のバネである。児童の成長はこれらの衝動を具体的にどのような教科教材—カリキュラムとして組織し、また、どのような方法を与えるかで、教育の良否が決められることになる。デューイはこうした認識と理論のもとに、実験学校の教育を考えたのである。

衝動に関連して興味 (interest) の問題が提出されたが、このことについても分析的かつ体系的に論じられた。中心的にはそれは「教育における興味と努力」(「Interest and Effort in Education」1913) においてであった。

デューイにとって真の興味 (genuine interest) とはある対象や観念と自己とを行為を通して提携させることであって¹⁰⁾、興味は児童の発達のための訓練 (discipline) において、重要な基礎をなすものである。それは成長へのキポイントになるものであった。またそれは、いわばなければならない事実、あるいは成長しつつある自己にとってくわだてられた活動それ自身と同一のものだと理解する原理でもあるのである。興味を心理的な側面から分析すると、それは第一に活動的 (active)、投射的 (projective)、推進的 (propulsive) であって、力動的な性

格をもつものなのである。第二に客観的なもの (an object of regard) であること。そして第三に個人的であって、直接の関心 (direct concern) を示すものなのである¹¹⁾。これらの興味の心理的特性を端的に性格づければ、それはまさに自己表現的活動の一つの形式としておさえることができよう。要するに真の興味というものは、人間がある活動の方向と提携した、あるいはそのことの中に自己自身を見出したことを意味しているのである。

デューイは興味の問題を教育理論に関連づけて、目的や手段について自我の確認を明示していること。興味をその動的性格や発展の性格を無視すれば誤まった概念を持つに至ること。興味の観念は教育学理論を保護すること。そして背後に諸条件を考えてその目的を達成するようはつきりさせなければならないこと等をあげ、典型的な教育的興味 (educational interest) を整理しているのである¹²⁾。

- ①真の興味 (genuine interest) は常に仕事¹³⁾が追求の力の専念によって示されること。
- ②活動 (activity) は能力の成長を含むあらゆる表現を含んでいること。
- ③真の教育的興味 (true educative interest) が活動はあいまいなものとは異なっていること。
- ④身体的活動 (physical activity)
- ⑤構成的活動 (constructive activity)
- ⑥知的活動 (intellectual activity)
- ⑦社会的活動 (social activity)

こうしたデューイにおける興味理論は、教材論と教育方法論への基礎理論として位置づけられている。

デューイは学校教育について、教材 (subject matter) と教授法 (method) と管理 (administration) は三位一体 (trinity) である¹³⁾と主張し、特に教材と教授法を分離することは根本的に誤まっているとして批判する。そして教授の過程は思考 (thinking) の習慣を養成することに集中することにおいて統一があると述べて¹⁴⁾、思考の問題を取り上げているのである。

さて思考の問題については、“経験” (experiences) “行為” (action) “探求” (inquiry) “自由” (freedom) “科学” (science) “実験” (experiment) 等々の諸概念との関連において多面的多角的に論じられている。思考、認識等の問題は教育関係著作だけでなく、哲学、心理学関係、その他多くの著作のなかで論述されているが、ここでは実験主義教育理論に直接関係し、アメリカ新教育理

論形成の時間的経過のうえからいっても、最も重要な一つと思われる「思考の方法」(「How We Think」1909)を中心に整理しておきたい。

思考および思考作用は生活におけるある当惑(perplexity)、混迷(confusion)、疑問(dout)から起こるものであって、その性格は積極的燃焼の事態であるとか、普遍的原理(general principle)から起こるものではない。ある困難な難問に出会い、そこから脱け出るための方法としての暗示として起こってくるもので、試行的な解決方法として起こってくるものなのである¹⁵⁾。思考は自動的でもあり、奔放でもある。したがって思考自体は知能とか知性に必ずしも関係なく起こるものでもある。思考はある状況の中から様々な形をとりながら起こってくるが、デューイはこの思考を彼の思考理論の中で整理しながら、価値ある思考、教育的に必要な思考として、反省的思考(reflective thinking)を取りあげるのである。

反省的思考は、思考の起源でもある疑惑、当惑、困惑等を含みつつ、さらにその上に疑問を解明し、当惑を処理していくのに必要な資料(material)を見出すための探索と渉猟、探求の作用を含むものなのであって¹⁶⁾、この反省的思考は一連の鎖的性格のもので、目的による思考の整理を進めるものである。この反省は観察(observation)、暗示(suggestion)なども含む性格のものである。

デューイは反省的思考については五つの側面(phases)を考えている¹⁷⁾。

- ①暗示(suggestion)
- ②知的整理(intellectualization)
- ③仮説(hypothesis)
- ④推論(reasoning)
- ⑤行動による仮説の検証(testing the hypothesis by action)

である。

「暗示」には可能な解決にむかっただけの精神的な飛躍があり、「知的整理」では解決を求めている「問題」を感じつつ困難や当惑の知的整理が行われる。「仮説」は暗示を指導的観念として仮説を設け、さまざまな観察、事実や材料を集めたりする。「推論」は暗示された解決方法に対してであり、「行動による検証」は具体的行動によって仮説を検証するものである。これら五つの側面の前後関係は必ずしも固定しない性格のものなのである。

このデューイの思考理論は教育方法論、学習理論とし

て学校教育へも具体的に理論化されて提出される。

これら思考理論に関連しての重要な探求(inquiry)理論についてであるが、彼は「論理学」(「Logic」)の探求理論(「the theory of inquiry」)で“探求”は一つの未決定な状況から、最初の状況の諸要素をある統一された、あるいは方向づけられた変形であると特色づける。探求理論の重要性を、J・ペエルシュタインは、探求の諸段階や契機は、探求上で実際に生じる事からの時間的順序を示すものではないこと、探求の異なった形式や様式があること、探求を導く規準は標準的であるか、調整的であること、探求は注意深い計画的な訓練を必要としている一つの技術であること、知識は探求を通じて保障されるか正当化されるものであることに関連させながら指摘している¹⁸⁾。さらにデューイは思考、探求において実験や行為の重要性を認めているものであった。

III

1896年に創設されたシカゴ・デューイ実験学校は新教育史上画期的なものであった。それは西欧の新教育運動とも、アメリカの先立つ諸学校とも異なった独自のものであった。

デューイ実験学校はデューイ理論の実行の場として、全く実験的に設立されたものであった¹⁹⁾。実験学校の諸原理は純に児童の直接活動のアイデアとして既存のものとは全くちがっており、その特徴は第一に、最初の学校における活動と家庭でのそれとの矛盾がないこと、第二に、児童は将来における成人した生活への準備よりは現在においてよりよく生きることを学ぶこと、第三に、学校とは児童の好奇心が諸問題によってひき起こされ、また彼等自身の発見性と創造性をよく使用することを通して、できるだけ彼等自身の方法によって解決を見出していくことに挑戦していけるような場であるべきこと、第四に、問題自身が児童を訓練するものであり、また児童の学習は彼等の能力によく合って、興味あるべきこと、第五に、教師は児童があらゆる教授の中心であり、彼等の精神的、身体的、社会的発達が教育の目的であることをよく理解していることである。また教師の仕事は児童の好奇心をひき起こす問題を選び、彼等の周りの世界を観察し、彼等に探求心をいっそう強くしていくように実際に価値ある経験を選びとっていくこと、などであった²⁰⁾。

この実験学校で直接教え、この間の豊富な資料をもって、実験学校の教育の特色を記録、論述したメイヨー

(K. C. Mayhew) とエドワーズ (A. C. Edwards) は、実験学校の性格について詳細にふれている²¹⁾。実験学校は大学の一部であると同時に教育の場である。したがっていっぼうでは研究の自由が、他方では児童の正常な発達の保証が必要であった。カリキュラムは静止的なものではなく、児童の成長と経験にしたがって変化していく欲求や興味に対応しなければならない。学校の物理的、社会的環境を整えて児童の全人的な発達をうながしていく教育内容を探求し、児童の能力に合わせてその過去経験を現在未来へとつないでいく適切な教材を求めて研究や観察がすすめられた。教材を生かし、子どもが環境支配力を伸ばして自発的な習慣と探求の技能を増すような授業方法が試みられた。

実験学校の教育計画は家庭生活の順を追って単純化することであったが、計画の背後には二つの基本原理があった。一つはすべての教育の出発点は児童の活動的欲求、周囲に反応して具体的表現を求める衝動であるということであり、第二には、教育の過程は材料とプラス・マイナスの条件を与えながら児童の表現を知的社会的な形へと指導していくということ、これらの基本原理が実験学校の構成と活動を詳細に決定したのである。

初期における実験学校のカリキュラムの発展は全く実験的で仮説を試みた段階 (1896～8年) とその成功だった課程や方法に基づいて発展と改良の時期 (1898～1903年) の時があったというが²²⁾、要するに実験学校のカリキュラムは児童の活動による構想が中心であったといえよう。そして実験学校全体のカリキュラムは児童の発達段階が年齢によって構想され、具体的な内容が配置されたのであった。

メイヨー、エドワーズは彼女たちの実験学校についての著作「デューイ実験学校」のⅢ・で理論と実践の評価について詳述しているが、そこで発達の原理、発達に必要な条件、発達の徴候と原理にふれながら教育における科学的研究の原理を、それは児童の経験から分離されず、ありふれた日常的な材料を自分で観察し考え、実験することを通して科学的事実と方法に親しんだこと、教育の諸過程の総合と興味、活動の所産であること、関連する環境などとの問題として説明している。また疑問と実験の自由の問題としてなどで分析をしているのであった。

児童とカリキュラムの問題については、1902年、実験学校が創設期のカリキュラムに反省と検討を加え、更に発展の基礎をつくらうとしていた時、デューイは「児

童とカリキュラム」(「The Child and Curriculum」) を発表した。これは当時の旧教育に対する批判と新しい教育理論建設への挑戦を意味していた。小論ではあるが、きわめて意欲的に児童観、教育および教育方法論、カリキュラム論などを展開しているのである。

デューイはカリキュラム構想の基本に当る児童の活動について、「活動は反応であり、適応であり、調整である。全くの自己活動が可能であるようなものは、少しもない。なぜならすべての活動はある範囲のある場の中でおこなわれるからだ。活動は環境や場の諸条件と関係しているものだ」²³⁾ と論じて活動を活動対象への反応や適応、調整という相対的作用のものとしてとらえている。また活動に関係して児童の学習も、学習は能動的なものであり、それは児童の心が働く範囲のなかで熱中するものであり、学習は心の中から湧き出てくる有機的同化作用をとらうものだとする²⁴⁾のである。

デューイにあって教育・学習は、まさに児童が出発点であり中心であり目標であった。そして児童の発達・成長は理想的なものであり、それは発達や成長だけが基準を与えてくるものなのである。また諸々の学習内容は、成長の要求に役立つものとして評価された道具であって、児童の自己実現こそが教育・学習の目標となるのである。「児童とカリキュラム」での鋭い教育学的論点は、デューイの実験主義教育理論の実験場でもあった実験学校の教育理論の補説としてだけでなく、重要な教育カリキュラム論争の時点だけに一つのエポックをなす議論でもあったのである。

デューイは実験学校について、創設当時の様々の状況のなかで、非常に意欲的であった。それは彼にとっては単なる大学の附属学校ではなく、彼の教育学、心理学、哲学の具体的実験であり、彼の諸説の検証実験でもあったからである。

G. ダイキエーゼン (G. Dykhuizen) の精密なデューイ研究 (「The life and Mind of John Dewey」) はこの間の事情を細部にわたって証言している²⁵⁾。

1894年7月デューイはシカゴ大学に着任すると同時に心理学、教育学を含めた哲学科を築くことに着手したのであった。同時にデューイの研究の関心は哲学、心理学、教育学の全分野に向けられていた。哲学に対する関心は彼の担当するいくつかの課程に向けられていたが、教育学の面でもそれは著しかった。教育学の面では、彼は、ヨーロッパ旅行から帰ってのちの1895年秋に、大学の独

立した機構として教育学科を作ったが、1897年までの学科課程は大学での教育学研究に新紀元をもたらしたのであった。同年秋にこれまで述べてきた大学附属の実験学校開設への準備に入り、翌1896年に開校したのであった。

デューイはこの実験学校で彼の機能的心理学理論とプラグマティズムの哲学、科学的探求法を検証しようとしたのである。またこれらの理論を、すでに論述した「学校と社会」「児童とカリキュラム」や「教育と適用された児童研究の成果」(「The result of child study applied to education」)「教育の基底にある倫理学原理」(「Ethical principles underlying Education」)等で明らかにしたのである。特に「学校と社会」は実験学校についての教育論、教授・学習理論、カリキュラム論、児童観等であったのである。「学校と社会」は1899年に最初公刊された時は批判的な注目を受けなかったが、教育者や教育的指導者には多大な関心を呼び、多くの時間を経ないうちに国内はおろか世界的な注目をあびるようになったものであった。デューイ理論は、その後哲学、心理学、教育学の各学界での評価がいっそう高まり、その後の理論的体系完成へと発展していくのである。

本稿で主題としたデューイの実験主義教育理論とその実践は、アメリカ新教育運動展開の史的過程のうえで、エポックをなしたものであった。1919年に結成された、アメリカ新教育運動の中心的組織であった P. E. A. は全国の多くの研究者、教師たちの巨大な集団であったが、その集団も教育思想、教育理論としては内部的にはいくつかの理論集団を有していた。そのなかにあってデューイの実験主義教育理論は、三十数年の P. E. A. の歴史上常に代表的な理論をなしていたものであった。本稿はアメリカ新教育運動研究の一部を構成するものであるが、これらの実験主義教育理論を基礎にした P. E. A. の組織と運動、その思想構造の全体的探求がひきつづいての課題になっている。

註

- 1) 例えば田浦武雄「デューイ研究」大浦猛「実験主義教育思想の成立過程」等の体系的研究をはじめとして、デューイ (J. Dewey) を中心とする多くのアメリカ研究がつづいて出されはじめた。
- 2) 例えば The School and Society, ch. I. The school and progress, Reconstruction in Philosophy, ch. I. changing conception of philosophy, Ibid., ch. II.

some Historical factors in Philosophical Reconstruction.

- 3) J. Dewey ; The School and Society, The University of Chicago Press, pp. 28—29
- 4) J. Dewey ; Democracy and Education, The Macmillan company, p. 51
- 5) Ibid., p. 53
- 6) Ibid., pp. 107—108
- 7) J. Dewey ; The school and Society, pp. 36—37
- 8) Ibid., pp. 43—47
- 9) Ibid., p. 47
- 10) J. Dewey ; Interest and Effort in Education, Augustus M. Kelly, Publishers, p. 14
- 11) Ibid., p. 16
- 12) Ibid., pp. 100—101
- 13) J. Dewey ; Democracy and Education, p. 164
- 14) Ibid., p. 163
- 15) J. Dewey ; How We Think, Henry Regnery company, A Gateway Edition, p. 15
- 16) Ibid., p. 12
- 17) Ibid., pp. 107—116
- 18) J. Dewey and The experimental spirit in philosophy (邦訳 C. W. ヘンデル編「ジョンデューイと実験主義・哲学の精神」杉浦宏訳 清水弘文堂 100—104頁)
- 19) Ida B, Depencier ; The History of The Laboratory Schools, Chicago Quadrangle Books, p. 18
- 20) Ibid., pp. 19—21
- 21) K. C. Mayhew & A. C. Edwards ; The Dewey School, The laboratory school of The University of Chicago, D. Appleton-Century company Inc, ch. I.
- 22) Ibid., I
- 23) J. Dewey ; The Child and Curriculum, The University of Chicago Press, Phoenix Books, pp. 30—31
- 24) Ibid., p. 9
- 25) G. Dykhuizen 「The Life and Mind of John Dewey」(邦訳「ジョンデューイの生涯と思想」三浦典郎、石田理訳、126—155頁)

Summary

New education in U. S. A. spreaded out as Progressive Education movement against traditional education in 21 th century. Progressive Education especialy developed through the organization of Progressive Education Association (1919—1952) and based on John Dewey's educational thought.

The character in John Dewey's educational theory is wellknown as experimentalism. John Dewey established Dewey school attached to the University of Chicago in 1896, and there he tried to test his educational and philosophical theory. Dewey school applied the curriculum, method, thinking theory, a view of child and another theory on John Dewey. The author would write on the thought structure of progressive education movement through these Dewey's theory in this paper.
